

設問一 次の四字熟語の空欄□に入る漢字を後の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|--------|--------|--------|
| 1 一知□解 | 2 □別離告 | 3 朝令□改 |
| 4 焦心□慮 | 5 右顧□盼 | 6 雨露霜□ |

選択肢 ア 愛 イ 左 ウ 苦 エ 雪 オ 半 カ 暮

設問二 次の意味を表すことわざ・慣用句を、後の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- 1 規律も統もなく集まった群衆のこと。
- 2 凡人が優れた人の真似をして、軽薄になることのこと。
- 3 勢いやはずみがついて途中でやめられなくなるることのこと。
- 4 乗り手が巧みに馬を乗り回し、乗り手と馬が一体となって見えるさま。
- 5 世の中は激しく移り変わり、定まりがたいということのこと。
- 6 外見だけ装って、実質の伴わないことのこと。
- 7 子と思う親の情愛が深いことのこと。
- 8 早い遅い、上手い下手の違いがあつても結局は同じところに到達するということ。

選択肢 ア 飛鳥川の淵瀬	イ 牛も千里馬も千里	ウ 虎を描いて猫に類す
エ 塙野の雉子、夜の鶴	オ 鳥合の衆	カ 鞍上人なく、鞍下馬なし
キ 騎虎の勢い	ク 猿に烏帽子	

設問三 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

本書がこれから語る夢は、①「一つのまったく異なつた知的欲望、知的文脈の交差点で成立している。

その一つは今から二世紀半前に記された政治思想の古典中の古典、ジャン・ジャック・ルソーの『社会契約論』である。人民主権を説き、「一般意志」の理念を提出し、近代民主主義の起源だと広く考えられているこの著作は、実際にはかなり謎めいたテキストで、②歴史的にもさまざまな議論を呼んでいる。本書の夢はまずは、この書物の記述を文字どおり、③ソボクにベタに解釈するところから始まる。そこに立ち上る「一般意志」のイメージが、いまわたしたちが漠然と抱いている「民意」や「世論」と大きく異なることに読者は驚くだろう。

そしてもうひとつは、この二〇年のあいだ、経済と社会の様相を根本から変えてしまい、そしていまも変えつつある技術的な革新、いわゆる「情報技術革命」である。オープンソース、アジャイルソフトウェア開発、ウェブ2.0、エディトリアルエナジードコンテンツ、クラウドコンピューティングなどなど、無数の buzzword (流行語) が数年単位で現れては消える。その世界の動向を要約するのはたやすいことではない。しかしそれでも言ってしまうと、パーソナルコンピュータが普及しインターネットが現れた一九九〇年代以降、その「革命」が一貫して目指してきたものとは、グーグルの④ソクギョウ理念を借りれば、「世界中の情報を体系化し、どこからでもアクセス可能で有益なものにする」といったことを要約することができる。そして筆者は本書で、その「世界中

の情報体系化」というきりげないひとことがいかに「世紀半前の『一般意志』の構想と響きあっているのか、時代を超えた『コホウ関係』について語りたいと思う。

ルソーの時代には「一般意志」は、まったくの虚構、『三語起源論』における「詩人の言語」や『人間不平等起源論』における「野生の人」と同じような、議論を進めるために必要なひとつの仮定でしかなかった。彼はおそらくは、その「一般意志」なるものが目に見えて触れるようになることなく、想像もしていなかった。しかし、それから二世紀半の時間が経ち、わたしたちはいまや、ルソーのその仮定を、神秘主義めきで、技術的に「実装」することができる新しい可能性を手に入れている。筆者がこれから語ろうとするのは、そのような夢である。

わたしたちは近代の民主主義社会に生きている。あくまでもその枠組みのなかで、国家について、政府について、公共性について、市民について考えている。しかしもしその起源の場所に、それらすべての枠組みを転倒し、のちに長いあいだ抑圧されることになったある不可能な「欲望」が刻まれ、しかもそれが、二世紀半を経ていままさに別のかたちで浮上し、顕在化し、「症状」として白日のもとに飛び出しつつあるのだとしたら、どうだろうか。

筆者はさきほど、本書では夢について語ると記した。夢といえばフロイトの精神分析が思い起こされる。

フロイトは有名な『夢解釈』で、夢の分析を「源泉」と「材料」、「夢思想」と「夢内容」を区別するところから始めている。彼によれば、夢を正確に分析するためには、夢見言葉や映像をそのまま受け取ってはならず、背後に隠れた「思想」、欲望の「源泉」を掴まなくてはならない。その区別を借りるならば、本書の主題は、一般意志という「夢思想」が、情報技術という「材料」を用いていま新たに結晶し出つつある近代の夢を可視化すること——そんなふうに表現してよいのかもしれない。

本書は夢について語る。しかしそれは、決して筆者個人の夢ではなく、^⑤ おそらくは近代社会が長いあいだ隠れ続けてきた夢なのである。

それでは、さっそく夢のなかに入っていくこととしよう。まずはジャン＝ジャック・ルソーという思想家について、いくつかの前提を確認しておきたい。

ルソーは一七二二年生まれ。ジュネーブで誕生し、のちパリで活躍した。一八世紀のフランス語圏を代表する思想家で、現在では、さきほど挙げた政治思想の績、一七六二年に出版された『社会契約論』でもっともよく知られている。この書物は思想的には、ホッブズの『リヴァイアサン』、ロッキンの『市民政府論』に続く社会契約説の古典とされ、人民主権の理念を説いてフランス革命に決定的な影響を与えた。前述の「一般意志 *volonté générale*」とは、人民の総意を意味するルソーの造語である。——と、このあたりまではおそらく高校の授業でも習うところだろう。

しかし実際には、ルソーはじつに多才な人物だった。彼の総体を掴まえるには、思想家というよりも「文筆家」というもう少し軽めの名称のほうがよいのかもしれない。ルソーは決して職業的な哲学者ではなく、その仕事は教育論から告白小説、恋愛小説、さらには歌劇の作曲まで多岐にわたっている。そしてそのいずれもが（歌劇は例外として）、多大な影響を後世に与えている。たとえば森原武夫は、『ルソー研究』の『ボヤトウ』をつぎのような言葉で始めている。「主権在民、平等思想、社会主義、ロマンティズム、告白文学、民衆芸術、ヒューマニズム教育」……「いずれをとっても、これを根本的に理解しようとして、^⑥ 遡るとき、必ず逢着せずにはすまされぬもの、それがジャン＝ジャック・ルソーなのである」。「近代を知ろうとするものは、ルソーを知らねばならない」。

^⑤ ルソーの複雑さは伝記的な事実からも明らかである。ルソーの思想はいまでは、同時代のテイトロ、ダラン

ペールなどの「百科全書派」と並べて位置づけられることが多いが、実際には晩年の彼は百科全書派を忌み嫌い、パリのサロンとは距離を置いて孤独に思索に耽ることを好んだ。他方で彼は『社会契約論』の出版の前年、一七六一年に恋愛長編小説『新エロイズ』を上梓している。この小説は大変な熱狂を呼び、ルソーの名を「麗世」に知らしめることになった。『新エロイズ』は一八世紀におけるフランスで最大のベストセラーだとも言われている。

つまりルソーは、彼が生きていた時代においては『社会契約論』の著者としてよりは『新エロイズ』の作者として、^⑧硬派な政治思想家としてよりもむしろロマンティックな恋愛小説の書き手として知られていたのである。ルソーといえば、いまではまず思想家という印象があるが、^⑨当時の受け止められ方は異なっていたのだ。このことは頭に入れておいていただきたい。

さて、ルソーはどのようにして多様な業績を残した。それは言い替えれば、後世の解釈者によって見えかたが異なる、ときに鋭い矛盾を孕む複数の顔がそこに刻まれているということでもある。

そして、いまルソーをあらためて読みなおすと、そのなかでもっとも重要になってくるのが、ルソーという思想家が、一方では極端な個人主義者であるかのように、他方では極端な全体主義者であるかのように見えてしまうという矛盾である。エルンスト・カントレーラーは一九三三年の論文で、その矛盾を「ジャン・ジャック・ルソー問題」と名づけている。代表作の『社会契約論』はじつは、その「問題」がとりわけ先鋭に現れている書物でもある。

ルソーの思想は、一般には、個人の自由、感情の無制約な^⑩発露を賞揚するものとして知られている。たとえば『学問芸術論』と『人間不平等起源論』は、自然状態にいる「野生の人」の自由と幸福を謳いあげるところから始まっている。また『エミール』では、できるだけ子どもが自発的に育つままにしておくこと、その内発性を社会の悪から守ることを理想の教育の柱としている。ルソーはつぎのように記している。「自然の最初の衝動はつねに正しい。[……] 初期の教育は、だから、純粋に道徳的であるべきである。それは、徳や真理を教えることにあるのではなく、心を悪徳から、精神を誤謬から保護することにある」。

他方でルソーは文学史的にも、『新エロイズ』で近代的な恋愛を、『告白』で近代的な「私」を創出したことで知られている。彼は、天性に対して感情の価値を、社会に対して個人の価値を、権力に対して自由の価値を訴え続けた。だからこそ彼のテキストは、一九世紀から二〇世紀にかけて、「主体」と「実存」が思想の中心にあった時代に延々と読み継がれてきたのである。カントレーラーは、そのようなルソーの立場をつぎのように要約している。「ルソーがその時代にもたらした独自の、真に新しいものは、まさにかれが主知主義の支配からこの時代を解放したという点にこそ存すると思われる。一八世紀の文化の根底をなしている反省的悟性の諸力に、かれは感情の力を対置する」。

しかし、そのような理解のもとで『社会契約論』を読むと、そこにはまったく異なつたルソーの顔が、少なくとも表面的には^⑪かなり異なつた印象を与える思想が記されていることに気がつくだろう。

むしろそこにも、『人間不平等起源論』や『エミール』と共通する人間観や社会観が記されている。単純な転向があるわけではない。そもそも『エミール』と『社会契約論』は同じ年に出版されている。

しかし、ルソーは『社会契約論』では、個人の自由を賞揚するかわりに、個人（特殊意志）の全体（一般意志）への絶対の服従を強調しているようにも見える。たとえばつぎのような一節がある。「社会契約において」各構成員は自分の持つすべての権利とともに自分を共同体全体に完全に譲渡する「……」。「……」この譲渡は保留なしに行なわれるので、^⑫結合はこのうえもなく完全であり、どの構成員も、もはや要求するものをなに一つ持

たない。『社会契約論』によれば、国家の意志は市民の意志の統一そのものであり、その定義上決して誤りに陥ることがない。したがって彼は、国家が死を命じるときは、市民はその命法に無条件に従うべきだとまで断言してしまう。そのようなルソーの言葉は、現実にはフランス革命でテロ（ロベスピエールの独裁）を生み出すことになった。

じつは『社会契約論』はこの点では、個人主義どころか、⁽⁵⁾ラティカルな全体主義の、そしてナショナリズムの起源の書としても読むことができるのである。実際にこの二世紀半、この書物はそのような文脈でもまた繰り返し参照され続けている。わたしたちがいま信じている近代民主主義の理念は、そのような⁽⁶⁾リョウギ的な、矛盾に満ちたテキストから生まれた。

まとめよう。ルソーは個人の社会的制約からの解放、孤独と自由の価値を訴えた思想家だった。しかし彼はまた同時に、個人と国家の絶対的融合、個人の全体への無条件の包含を主張した思想家でもあった。この二つの特徴は、常識的に考えるかぎりまったく両立しない。また、ルソーの歴史的な重要性に照らすとそのまま放置できるものでもない。

ここに、ルソーの、そして民主主義の謎がある。

それでは、この矛盾はなにを意味しているのか。議論の混乱として単に片付けてよいものなのか。

哲学者たちはこの問いにさまざまな回答を与えている。そのなかでも思想的にもっとも重要なものは、ヘーゲルのいささか曲線的な解釈である。彼は——いささかわかりにくいとは思うが——あえて要約すると——、⁽⁷⁾「以上」の逆説を生み出す「一般意志」の謎めいた概念を、個人の意志（特殊）と国家の意志（普遍）、その対立そのものを「⁽⁸⁾止境」する契機として解釈し、独特の哲学体系のなかに組みこもうとしている。本書でも、ヘーゲルのその試みの意味について触れることになるだろう。

しかし、冒頭で宣言したように、本書では基本的には、そのような思想史を振り返るのではなく、もっと大胆に、軽率に、むしろ哲学の外の連想にしたがって『社会契約論』を読み、ルソーの「矛盾」を解きほぐしていくことにしたい。

そしてそこで筆者が呼び出したいのが、さきほど述べた第二の文脈、すなわち、情報技術革命が産み落とした、もろもろの技術とアイデアなのである。

というわけで、ここで導入したいのが、「⁽⁹⁾集合知」あるいは「群れの知恵 wisdom of crowds」という言葉である。

集合知とはなにか。それは読んで字のごとく、集団が生み出す知性を意味する。「集団的知性」と訳すと、複雑系やシステム論、人工知能研究などの分野でのハイブローな議論を連想させるが、ここではもう少し社会的な、世俗的な含意をもつ言葉として理解してほしい。みんなが集まって考えると、ひとりでは生み出せなかったようなうまい回答が出てくるのがしばしばある。それが集合知だ。

『重造紀』『一般意志』2・0 ルソー・フロイト・グーグル』第二章、講談社、二〇一二年。一部表記を改めた

問一 二重傍線部①～④について、漢字は読み方を平仮名で、カタカナは漢字で書きなさい。

問一 傍線部（一）「二つのまったく異なつた知的欲望、知的文脈」について、（一）「知的欲望」と（二）「知的文脈」に相当するものを、文中からそれぞれ四字以内の語で抜き出さない。

問二 傍線部(ⅱ)「歴史的にもさまざまな議論を呼んでいる」とあるが、実際にその議論を行った人物としては不適切なものをひとつ選びなさい。

- 1 ヘーゲル 2 桑原武夫
- 3 フロイト 4 カンシーラー

問四 傍線部(ⅲ)「おそらくは近代社会が長いあいだ忘れ続けてきた」理由として、最も適切なものをひとつ選びなさい。

- 1 仮定でしかなかったから。
- 2 謎めいていたから。
- 3 二世紀半も前のことだから。
- 4 背後に隠れたものを掴むことは困難だから。

問五 傍線部(ⅳ)「ルソーの複雑さ」とはどのようなことか、最も適切なものをひとつ選びなさい。

- 1 ジャンルにとらわれない執筆活動をし、多くが評価されていること。
- 2 孤独を好みながらも、他者との感情的な結合を説いたこと。
- 3 百科事典派でありながら、百科事典派を忌み嫌っていたこと。
- 4 近代以前の教育を受けながら、近代的な「私」を発見できたこと。

問六 傍線部(ⅴ)「当時の受け止められかた」として最も適切なものをひとつ選びなさい。

- 1 文筆家 2 恋愛小説の書き手
- 3 近代民主主義の父 4 百科全書派

問七 傍線部(ⅴ)「かなり異なった印象を与えた思想」として最も適切なものをひとつ選びなさい。

- 1 民主主義 2 個人主義
- 3 全体主義 4 社会主義

問八 傍線部(ⅴ)「ラディカルな全体主義の、そしてナショナリズムの起源の書としても読むことができる」理由として最も適切なものをひとつ選びなさい。

- 1 個人の自由を一切認めなかったから。
- 2 個人による独裁を招いたから。
- 3 主知主義よりも個人の感情を重視したから。
- 4 国家に対する絶対的服従を求めるから。

問九 傍線部(ⅴ)「以上の逆説」を文章中の語をできるだけ用いて、五十字以内(句読点を含む)で説明しなさい。

問十 傍線部(ⅴ)「集合知」にあてはまることわざをひとつ選びなさい。

- 1 三人寄れば文殊の知恵
- 2 大は小を兼ねる
- 3 犬も歩けば棒に当たる
- 4 牽するより産むが易し